

International Culture Appreciation & Interchange Society, Inc.



一般社団法人

海外と文化を交流する会

(一社) 海外と文化を交流する会 会報

2018年8月発行 第65号

おかげさまで当会は創立50周年を迎えることができました



松岡朝が設立した南京施粥廠（1943年頃）で配膳中の朝

- 目次
- ★ 50周年記念「チャリティーコンサート」開催日程のお知らせ (P2)
 - ★ 25点の日本画が豪州首都へ移管完了 (P2)
 - ★ 新理事・新監事 就任報告 (P3)
 - ★ 「松岡朝物語」(仮称) 第12回 (P3)・第13回 (P12)
 - ★ 年度報告・計画 (P18)

50周年記念「チャリティーコンサート」開催日程のお知らせ

開催日程：2018年12月7日(金) 会場：霊南坂教会
出演者：青盛のぼる(ソプラノ) 他、弦楽四重奏、ハーブ

当会発足より50年。今年のチャリティーコンサートは、世界の歌姫『青盛のぼる』(ソプラノ)、及び『東京ハルモニア室内オーケストラ』の主要メンバーによる弦楽四重奏、そしてハーピスト(日本ハーブコンクールプロフェッショナル部門第一位)をお迎えして開催致します。是非、お楽しみください。

★青盛のぼる プロフィール：

立教英国学院卒業。国立音楽大学声楽学科卒業後イタリアへ留学。トルトーナ国際声楽コンクール第一位入賞。1995年にパレルモにて“一日だけの王様”でオペラデビュー。リクルートスカラシップ生、文化庁派遣在外研修員として研鑽を積み、第66回日本音楽コンクール声楽部門最高位をはじめ、マリアカニーリアコンクール、ジョルダノコンクール、サンレモコンクール(特別賞)など多数のコンクールで上位入賞。2002年、2003年、バリトンのLeo Nucci氏とコンサートを行う。その後オペラ活動に参加。Il Trovatore、蝶々夫人、Aida、Turandot、Toscaでザルツブルクの祝祭劇場大ホールで上演したのをはじめ、魔笛(夜の女王)でブカレスト国立劇場で出演、アメリカ、ヨーロッパの劇場にてNabucco、Macbeth、Don Carlo、フィガロの結婚など200公演以上の実績を持つ。その後、スイス“ゾロトゥルン”音楽祭でCosi fan tutte、Nabuccoで出演。2014年、コモ市民劇場にてニューイヤークンサーツに出演。2015年、“ベルカント発声セミナー”を東京にて開く。2017年、イタリアにて“Aida”、和光にてTurandotでタイトルロール主演。

25点の日本画が豪州首都へ移管完了

1977年に当会によって豪州へ寄贈された日本画巨匠の作品25点が、晴れて豪州首都のキャンベラにある「ナショナル・ギャラリー・オブ・オーストラリア」に、メルボルンの「ナショナル・ギャラリー・オブ・ビクトリア」から正式に移管されました。

寄贈された当時はキャンベラに大きな美術館がなかったため、今まではメルボルンの美術館で保管されておりましたが、これにより、25点の日本画は当初の悲願通り、オーストラリア国のものとなりました。

これまでのいきさつの詳細は、2016年7月発行の第59号会報誌で既に報告済みとなっておりますので、当会のホームページ上のPDFファイルでお読みいただく事ができます。

新理事・新監事 就任のご報告

今年度から、新理事として 角谷滋 氏が就任しました。
また、これまで長い間、監事としてご尽力いただきました 角谷多美子 氏に代り、新監事として
下村トシ子 氏が就任いたしました。

松岡朝物語(仮称) 第12回

第12回 敗戦——生と死と

文／角山祥道

58

1944年(昭和19)になって、松岡朝の目にははっきりと、日本の惨状が見て取れるようになった。
朝が上海の目抜き通りである上海バンドを歩いていた時のことだ。大勢の日本兵が、人目も憚らず、
街路樹にもたれて休んでいた。その中に、壮年の兵士はいなかった。多くの兵士が、50歳を超えてい
るように見えた。中には、若い兵士がいないことはなかったが、彼らは10代のようなようだった、共通し
ているのは、誰もが疲れ切っていたことだ。中国大陸を肩で風を切っていた日本兵の姿は、そこには
なかった。

駕籠を担いだ物売りの少女が、日本兵たちの元に近づいていく。駕籠の中には、黒砂糖のお菓子が
山盛りになっている。兵士たちは、疲れ切った目で少女を見るばかりで、誰も答えようとしな
い。彼らはお金すら持っていないのだ。

一方で上海の港には、10代の少年たちが次々と上陸してきていた。海軍飛行予科練習生——予科
練の少年たちだ。彼らは、14才半から17才までの少年で、約半年の訓練を経て戦地に送り込まれた。
彼らの大半は、ただの飛行機乗りではない。敵に体当たりするためだけに集められた決死隊だ
った。決死隊の少年たちは、海軍から支給された立派な軍服に身を包んでいた。金ボタンに、腰から下げた
長剣……。

彼らは皆、目的のない戦争に命を捧げるためだけに、ここにいるのだ。朝は上海で決死隊の少年た
ちを見かけるたびに、胸が痛んだ。

〈恥を知る者は強し。常に郷党家門の面目を思ひ、愈々奮励して其の期待に答ふべし。生きて虜囚
の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ)

当時、陸軍大臣だった東條英機が出した訓令、「戦陣訓」である。この「戦陣訓」は、のちに日本
文学報国会名誉会長となる島崎藤村のアドバイスのもと、この形となり、世の中に流布した。決死隊
の少年たちは、「戦陣訓」の教を胸に、敵に突っ込んだ。

東條による陸軍航空士官学校の抜き打ち視察の逸話が残っている。
東條は生徒を捉まえると、問いただした。

「敵機は何で落とすか」

敬礼しながら生徒が答えた。

「機関銃です」

東條は、首を大きく横に振った。

「違う！ 敵機は精神力で落とすのである」

1944年2月、「戦陣訓」の張本人である東條英機が陸軍大臣だけでなく、参謀総長も兼任。独裁体制を確立する。一方で、6月にはサイパン島で玉砕。マリアナ海戦では大惨敗を喫す。8月になると、政府は、「一億国民総武装」を決定し、この頃から竹槍訓練が一般化する。「敵機は精神力で落とす」と信じていた東條は、竹槍で十分だと考えたのだろうか。

同じ時期に連合軍はパリに入城。アメリカ大統領のルーズベルトと、イギリス首相のチャーチルは、早くも原爆の対日使用の検討を始めていた。

日本国内で大本営発表を聞いていた人間よりも、朝ははっきりと日本の現状を把握していた。外国のラジオ放送から流れるニュースや、中国人の友人から入ってくる情報は、日本が滅亡に向かってひた走っていることを教えてくれていたのである。

59

独り身の朝にとって、姪の初江一家の存在は、生活に彩りを加えていた。

姉・啓子の長女である初江を、小さい頃から朝はことのほかかわいがっていた。初江もまた、「おばさま」と呼んで朝を慕った。その初江は、歯科医の秀夫に嫁ぎ、長男の昭斌、長女の裕子と2人の子宝に恵まれていた。

秀夫は、軍籍にあった。歯科医として軍に勤めていたのである。その関係で、中国大陸に渡ってきた初江一家と、朝は家族同然の生活を送っていた。

1944年の冬、秀夫たちは、蘇州——上海の隣に位置する「東洋のヴェニス」といわれる街へ引っ越した。秀夫が蘇州の病院の歯科医として勤務することになったのである。

引越当日は冬の寒い日だった。

秀夫たちを乗せた車のドアが、ボタンと閉まった。

出発しようかという矢先、後部座席のドアが開くと、少女が飛び出してきた。胸には人形を抱いている。6歳になったばかりの裕子だった。

裕子は駆け出すと、朝の胸の中に飛び込んだ。

「これ、持っていてね」

大事にしていた人形を、朝に押しつける。

「また来るからね！」

朝は、裕子の優しさが嬉しかった。きっと、自分の身代わりのつもりなのだ。朝はそっと、人形を抱きしめた。しかしこの時はまだ、「また来るからね」と言ったそのひと言が、すぐに現実のものとなるとは、思っていなかった。



この時、初江は3人目の子を身ごもっていた。

お嬢さん育ちの初江は、寒さの厳しい北海道に嫁ぎ、非常に苦勞していた。そして、夫とともに中

国へ。慣れない異国の地、しかも戦時下だ。初江の心労は重なった。知らないうちに、体のあちこちが蝕まれていた。

そこへもってきて、妊娠である。

「出産はあまりにも危険です」

医師からもそう告げられていた。だが、初江は「産む」と決めていた。

蘇州の田舎の病院での出産だった。

1945年（昭和20）2月26日。深夜の出産に立ち会う専門医はおらず、傍らにいたのは、若い見習看護婦だけだった。それでも無事に女の子を生み落としたが、初江をケアできる人間は誰もいなかった。通常の出産よりも出血は多く、その影響で、初江はそのまま病床に伏せてしまった。

初江たちが住んでいた宿舎は、蘇州の中心部から奥まったところにあり、駅から歩いて行けるような場所になく、別の乗り物に乗り継がねばならなかった。朝のいる南京から、気軽に日帰りで行けるような場所ではなかったのだ。

朝にとって、初江はかわいい姪っ子だ。幼子を抱え、たいへんなこともわかっていた。

しかし、「アメリカ留学生クラブ」に「南京児童学園」、そして「施粥廠」と、朝は体が3つあっても足りないほどだった。見舞いの時間すら確保することができなかった。

それでも何とか顔を出すと、初江は衰弱しきっていた。

「おばさま、1か月でいいから、そばにいて看病してもらえないかしら？」

朝は初江から懇願されたが、どうすることもできなかった。

春を迎え、戦争は悪化の一途を辿っていた。

2月には硫黄島で守備隊2万6000人が玉砕し、3月にはB29の大編隊が東京を空襲し、150万人が焼け出された。死者は8万人を超えたといわれている。中国本土にも、アメリカの爆撃機が飛来するようになっていた。

そんな最中、初江の夫の秀夫が、中国の奥地の戦線に送られることになった。初江は、産まれたばかりのわが子に、授乳できないほど弱っている。ここで夫に戦地に行かれたら、もう立ちゆかない。

せめて妻子の近くで任務することはできないか。

朝は、わずかなコネを頼りに、南京の軍司令部を訪れた。

「蘇州にいる姪が、重い病で病床にあります。乳飲み子と幼い2人の子どももいます。甥が再度奥地へ徴兵されそうです。南京の後方軍務をお与えいただけませんか？」

朝に対応した中佐は声を荒げた。

「きさまは、国のことでなく、自分たち身内のことだけを考えるのか！ 日本軍の歴史に照らし合わせても、私はきさまのように狼狽えた人を知らない。甥に限らず、どの兵士も規則に従わねばならん！」

「しかし……」

まるで、物言わぬ石に向かって語り掛けているようであったが、怯むわけにはいかなかった。

「おっしゃることはわかります。しかしここは、日本ではないのです。外地にあって、どうしたら病気の姪や、子どもたちは生きていけるのでしょうか？」

朝が何度懇願しても取り付く島はなかった。中佐は、怒気を含んだ声で、「ほかに方法はない。兵卒は規則に従え」と繰り返すだけだった。

もう手はないのか。

朝は、家に戻る途中、陸軍大佐が家の近所に住んでいることを思い出した。面識はないが、藁をもつかむ思いで、電話をかけてみた。

「松岡朝さんですね？ あなたのことはよく存じております。数年前に、満州の摂政の宮（皇帝溥儀）に会いに来られた松岡さんでしょうか？ 私は当時、近衛長でした。あなたの宮への拜謁を許可したの

が私です。今夜、お出でください。困っていることがおありなら、お話をお聞きしましょう」

すでに街の灯りは落ちていた。朝はすぐさま支度をする、お手伝いとして家を切り盛りしてくれている18歳のアキを伴って、暗い南京の街へ足を踏み出した。

「あっ！」

アキが悲鳴をあげた。大型犬が吠えながら走り寄って来たのだ。朝の住んでいる区画は、政府高官や軍人、企業家の住む界隈で、用心のため、番兵だけでなく、大型犬を飼っている家が多かった。そして大半の家が、夜間に犬を放し飼いにしていた。昼間ならともかく、夜遅くに女性2人だけ大佐の家に行くのは、不可能だった。

朝たちは慌てて自宅に逃げ帰ると、仕方なく大佐に断りの電話を入れた。

朝は、この晩のことを終生悔やむことになる。面会するはずだった大佐は、その後、朝と会う時間がとれなくなり、そうこうしているうちに、秀夫は中国奥地へ出立した。出発の前、秀夫は朝のもとを訪ねた。軍服に身を固めた甥に、朝は彼の大好きな卵と肉がたくさん入ったチャーハンを食べさせて、無事を祈って送り出した。

しばらくして、大佐と会う機会があったのだが、時すでに遅かった。あの時、南京の大使館勤務として4~5名を雇うことになっていたということだった。そのチャンスを逃してしまったのである。

朝は今まで以上にわずかな時間を見つけては、病床の初江のもとに通った。広い中国で、初江のもとに駆けつけることのできる身内は、もはや朝だけだった。

朝がいつものように見舞いに行くと、初江が突然、裕子を呼び寄せた。そして、動かすのも辛い手で、裕子の着ている服を脱がしていく。一糸まとわぬ姿にすると、テーブルの上に立つように、裕子に命じた。

「独り身のおばさまには、跡取りがどうしても必要よ」

呆気にとられる朝を尻目に、初江は続けた。

「この子を見て頂戴。どこも悪くないでしょ？ とても良い子ですよ。私はおばさまに裕子を託したいの」

朝には、病人の一時の気の迷いだと思われた。夫の不在に一人で考えてのことだろうが、親子の間を引き裂くようなことはできない。それでも、初江を安心させるため、朝は裕子の手を引いて、南京に連れ帰った。

蘇州での暮らしは、思った以上に裕子を疲弊させていたのだろう。懐かしい南京の家に着くと、裕子の顔はぱあっとほころんだ。

60

南京での朝の活動は、行き詰まり始めていた。一度は、黙認したはずの海軍が、またもや難癖をつけてきたのだ。

特に「アメリカ帰国子女クラブ」は、名称に「アメリカ」と入っている。敵国アメリカに関するものは、一切認めないというのが、海軍の揺るぎなき方針だった。

「直ちに解散せよ」

朝は、再度、海軍の上官のもとへ、手土産を持って挨拶に訪れた。一度目はこれで黙認してくれたのだ。

「昨日こちらから人が訪ねて来られて『アメリカ帰国子女クラブを解散せよ』と言われましたが、クラブの根本の目的は、中国の人々との友好を築くためです。日本側の善後処置のためのクラブです。どうかご理解いただけないでしょうか」

対応してくれた海軍の人間は、困ったような顔をしたが、「命令に従ってください」と繰り返すばかりだった。

これ以上、何を話しても埒があかない。

朝は、大使館に清水董三等書記官を訪ねた。

経緯を話すと、清水書記官は苦笑いを浮かべた。

「お分かりでしょ？ 松岡さん、私はすでに海軍から話を聞いています。海軍はアメリカを忌み嫌っているのです、たとえわずかであってもアメリカに関することを許したくないのです。大使も私も、あなたがなさっている仕事は大変良い仕事だと信じていますし、協力も惜しみません。しかし今は、時がそれを許しません。私たちも、もう中止しなくてはならない時が来たのだと考えています」

大使館もそういう考えならば、もう海軍の命令が覆る余地は残されていない。朝はきつく、唇を噛んだ。このクラブは、日中の友情のオアシスになるはずだった。だがそれはもうかなわない。朝は、門柱に掲げてあった、カン・フー博士(江亢虎)に揮毫してもらった看板を外す決意をした。

「南京児童学園」「施粥廠」……。

朝が心血を注いだ施設が次々と閉じられていった。

最後に閉じたのは、「施粥廠」だ。それが1945年4月のこと。

一貫して相談に乗ってくれていたヤン牧師に、朝は施粥廠の閉鎖を報告した。

「ヤン牧師、私は施粥廠の建物を貸してくれていた家主の方に、お礼をせねばなりません。どのようなお礼を差し上げるのがいいでしょうか」

「今、南京は、小麦粉も米も高騰しています。それらの袋をいくつか差し上げると喜ぶでしょう」

アドバイスに従い、小麦粉米の袋を持っていったが、あいにく家主は留守だった。仕方なく、手紙を添え、裏口に袋を積み上げて帰ってきた。

その日の夜に、家主が朝を訪ねてきた。

朝は、家主に頭を下げた。

「あなたは、私の日中友好の仕事のために、とても親切にしてくださいました。建物を貸して下さったこと、ほんとうに感謝しています」

「とんでもない。礼にはおよびません。私たち南京の人間は、あなたが他の日本人と異なり、私たちにとても親切にくださっていることを知っています。だからあなたのためになることは、どんなことでも喜んでしたいと、この南京の者たちは思っていたのですよ」

最高の褒め言葉だった。

クラブも施粥廠も終わる。しかしこうしてしっかりと、中国の人たちとの間につながりができたではないか。朝は、自分がやってきたことが間違っていなかったと、嬉しくなった。

施設を畳んだのを機に、朝は裕子を連れて初江のもとを訪れた。

初江の手足は、ところどころ、水ぶくれをおこしていた。心臓弁膜症と肝臓病を併発していて、もう動くこともできなかった。中国人の乳母を頼んでいたが、自分の子どもに乳をあげたあとに来るので、赤ん坊——祥子と名づけられた——は常に、お腹を空かせていた。泣いて乳を求めるのだが、どうすることもできない。

朝は裕子を初江の手元に残すと、その足で上海に向かった。薬を確保することと、初江の看護人を見つけるためだった。幸いにも、看護人は上海総領事館に紹介してもらって手筈が整ったが、数日走り回っても、薬だけは得られなかった。薬が圧倒的に不足していたこともあるが、たとえあったとしても、敗戦濃厚の日本人の足下を見て、売ってくれないのだった。

朝は、いったん南京に戻り、諸事を片付けると、また蘇州へと向かった。

朝が初江のところへ行くと、初江はいつも以上に喜んだ。

「おばさまが裕子を置いて行ったので、もう裕子をもらいたくないのだと心配していたの。病身の私

にはもう、この子のことまで面倒をみてあげることにはできません。裕子に愛情を注いでくれる人が必要なのです」

朝はこの時、初江が本気で裕子を松岡朝の子どもにしようとしていることが理解できた。実は、裕子をあえて初江のもとに置いていったのは、一時の気の迷いを晴らすためだった。だが、初江は本気だった。病身でありながら、跡取りのことまで心配してくれている初江が愛おしかった。

実際、裕子は朝に非常に懐いていた。

朝は1945年の夏、裕子を養女にすることを決心した。頼んでいた看護人が来てくれたこともあって、朝はそのまま、裕子を南京の家へ連れて帰った。以来、朝は裕子を娘として大事にした。

1945年7月中旬、清水一等書記官が朝のもとを訪れた。

もうのっぴきならないことは、お互いに分かっていた。同盟国のイタリアは早々に降伏し、ムッソリーニは銃殺。4月30日にはヒトラーが自殺し、5月7日には、ドイツが無条件降伏していた。

日本には、もう戦い続ける力が残っていなかった。

4月1日には、アメリカ軍が沖縄本島に上陸を開始。だが日本政府は、沖縄を見捨てた。日本軍は援軍を送らず、秘かに「本土決戦方針」を採択したのだった。6月23日に沖縄の日本軍は全滅。軍の死者は12万人超。沖縄県民の死者は、兵を超える17万人だった。ここでもあの「戦陣訓」が幅をきかせ、沖縄では集団自決が相次いだのである。日本兵は、沖縄の人々を守るのではなく、自決をすすめた。

一方、連合国側は、大戦後のことを話し合っていた。

朝たちは知る由もないが、7月17日から8月2日にかけて、ドイツ・ベルリン郊外のポツダムにおいて、イギリスのチャーチル首相、アメリカ大統領のトルーマン、ソ連共産党書記長のスターリンの3カ国の首脳が集まり、戦後処理を話し合っていたのである。のちの「ポツダム宣言」である。

「日本の新聞は事実を書かないでいますが、アメリカはすでに、日本政府に無条件降伏を要求しています」

「日本はどうするのですか？」

朝は清水書記官に尋ねた。

「応じるつもりはないようです。日本政府にとって降伏はとても耐えがたいことなのです」

この期におよんでも、日本は戦おうとしていた。彼らは、日本人のすべてが死に絶えるまで、続けるつもりなのだろうか。

朝にはどうすることもできなかった。

戦争を続けるべきではない。しかし仮に無条件降伏を受け入れたらどうなるのか。中国にいる多くの日本人は？ そして日本の勝利を信じ、天皇陛下のために戦ってきた兵隊たちはどうなるのか。

あれこれ考えても、不安でいっぱいになるばかりで、答えは見つからなかった。

朝は、中国を引き揚げるべき時が近づいて来ていることがわかった。

だがその前に父だ。

朝は、傍らの父・健一をじっと見た。83歳になった健一は、「娘のそばで力になってあげたい」と、しばらく前から南京に滞在していたのだ。だが83歳の老人にできることは少ない。何より、中国への船旅で、健康を害していた。朝は何度もすぐに帰国するよう促すのだが、健一は首を縦に振らない。

困った朝は、上海の教会にいる阿部義宗牧師に、父を説得して貰おうと考えた。

朝と裕子の2人で上海の街を歩いていると、頭上で爆撃音がした。アメリカの飛行機だ。街行く人をめがけて、機関銃を撃ち込んでくる。その一発が、朝たちをかすめて、近くの建物の壁に穴を開けた。

「危ない！」

朝は裕子を抱え上げると、近くの教会に飛び込んだ。

教会には大勢の日本人や中国人が避難していた。ホッとひと息つくと、朝は、自分の手がまだ震えていることに気づいた。

「裕子、怪我はない？」

朝は裕子の体をチェックする。怪我はない。それどころか、裕子は泣きもしなかった。朝は裕子の体を、「痛い」というまできつく抱きしめた。

61

8月15日。

敗戦の報せを、朝は南京の自宅で聞いた。朝はすぐさま、18歳のアキだけを残し、中国人の雇い人全員に給金とお米を与え、帰ってもらった。目下の難題は、南京からの脱出をはかることだった。

数日後、そんな折に、裕子の兄である昭斌が、看護人の女性とともに、南京の朝のもとにやってきた。何ヶ月ぶりの兄弟の対面だ。裕子と昭斌は、家の庭を無邪気に走り回った。

昭斌は、母親からの裕子宛の手紙を預かっていた。初江はすでに、自分でペンを握る力がなく、口述筆記をしてもらっていた。そこにはこうあった。

「裕子へ、これからは、おばさまが行くところは、どこへでもついて行くのですよ。あなたはよい子ですから」

すぐに蘇州に電話をしたが、もう繋がらなくなっていた。

集団で動くことは危険だった。朝は、看護人に、初江に渡すお金と手紙を託すと、昭斌とともに送りだそうとした。ところが、昭斌が「蘇州に帰りたくない」と言っているという。南京には妹もいて、食事にも不自由しない。

朝は心を鬼にして、9歳の少年に告げた。

「あのね、いい？ あなたをここにおいてあげたいのは、山々です。でも、君のお母さんはとても重い病気なの。そしてあなたのお母さんは中国人に囲まれていて、お父さんは戦争のため遠くに行っている。いったい誰が、お母さんとあなたの妹を守ってあげられるの？ あなたしかそれをできる人はいないのですよ」

今年9歳になったばかりの幼い子に、こんな辛い話を言って聞かせなければならぬなんて。朝の心は引き裂かれるようだった。しかしこうするほかない。昭斌まで手元に置いてしまったら、初江たちの一家は立ちゆかなくなってしまう。

昭斌は聡い子だった。

朝の話を黙って最後まで聞くと、大きくひとつ頷いた。泣くこともなかった。翌朝、昭斌は看護人とともに、列車に乗って母のもとへ帰っていった。

8月25日の夜、上海に用事があった朝は、裕子とともに列車に揺られていた。

明けて午前3時、列車は蘇州の駅に停車した。車窓の向こうには漆黒の闇が広がっていたが、この闇の向こうに初江がいる。朝は、何度、このまま列車を降りて駆けつけたいという思いに駆られたことだろう。だがそれが不可能なこともわかっていた。乗り物が見つからないだけでなく、日本人がふらつくことは命の危険があった。

列車の出発時間が来た。

朝は後ろ髪を引かれるような思いで、蘇州をあとにした。

後日、26日の早朝、幼子に見守られながら、初江が逝ったことを知った。享年35。あまりにも早

すぎる死だった。

62

上海で用事を済ませた朝は、裕子をひとまず、友人宅に預け、とんぼ返りで南京に向かった。父・健一とアキを迎えに行くためだった。安全のため、南京まで同行してくれる日本人男性を探しだし、共に列車で向かった。だがいつものように一等車に座るわけにいかず、一等車の通路に立ったまま、南京に着いた。

すぐに父とアキを促すと、家財道具も米もそのままにして、住み慣れた屋敷をあとにした。

南京の停車場に着くと、いつもの日本の憲兵は姿を消していた。代わって中国人の憲兵が目を光らせている。憲兵からいくつか質問をぶつけられたが、運良く、四等車に乗り込むことができた。

車内は混沌としていた。

網棚の上にも人が腰掛けており、朝の頭の上で、泥靴が揺れていた。駕籠の中に押し込められたガチョウの鳴き声が響き渡り、車内には、タバコの煙やニンニクの臭いなど、不愉快な臭いが混じり合っていた。

列車が走り始めると、朝たち一行はすぐに眠りについた。

上海に到着しようかというタイミングで、ひとりの中国人男性が朝に話しかけてきた。

「先生、先生。南京児童学園の先生ですよ？」

朝がそうだと答えると、男は続けた。

「昨晚、この列車で何があったか知ってますか？」

「いいえ、よく眠っていたので……」

すると男はにっこりと笑みを浮かべた。

「先生、私の娘は、先生の学園に通っていて、お茶の時間をとても楽しみにしていました。先生の小さいお嬢さんも娘によくしてくれました。多分、この車内いる連中や、その親戚の子どもたちの多くが、先生の学園で楽しい時を過ごしたはずですよ。先生は私たちにとても親切にしてくださいました」

ここまで一気に喋ると、男は息を継いだ。

「昨夜、とある駅に停車した時、日本人が乗っていないか調べるために税関職員が乗ってこようとしたのです。彼らは日本人を狙って、金品すべてを没収するのです。それで、私たちは、車両の前後の戸口に立って、『この車両に日本人は居ないから、探す必要はないよ』と言ってやったので、この車両は見逃されたのです」

健一は、朝の隣で男の話聞きながら、目に涙を溜めていた。

「南京でのお前の艱難辛苦は無駄ではなかったな。実は私は、お前の苦勞が支那人に分かるはずはないと思いついていた。どこかで、支那人を見くびっていたのかもしれない。だがそれは間違っていた。人情はこの国にも通じたのだ。真摯な気持ちで人に尽くせば感謝が返ってくるのだということを、朝、私はお前に教えてもらった」

朝は立ち上がると車内の人々にお礼を言って頭を下げた。彼らは皆、頷いてくれた。ある者は、私たちがお腹を空かせているに違いないからと、列車の窓越しに 8 個のゆで卵を買えるように助けてくれたりもした。皆、親切だった。

上海に着くと、朝たち一家は、大きな邸宅を構える親しい日本人宅に、ひとまずやっかいになりながら、ここで帰国のチャンスを伺った。

甥の秀夫たちも、上海に来ていた。昭斌、祥子、全員揃っている。彼らは多くの日本人と一緒に、日本人収容所で、帰国の便を待っていた。

ある日、秀夫は朝のもとへ、小さな壺を持参した。

「初江の遺骨が入っています。どうか半分は、東京の初江のご両親のお墓に埋葬してもらえませんか？ 初江もそれを望んでいます」

朝は、骨壺を受け取ると、その場で抱きしめた。

なぜ初江は、遠き中国で死ななければならなかったのか。

愚かな戦争さえなければ、死ななくてもすんだのではないか。

その夜、朝は裕子と一緒に、初江の入った骨壺を抱きしめた。そして2人で朝まで泣き明かした。いくら涙を流しても、悲しみが癒えることはなかった。

結局、上海での滞在は、敗戦の翌年、1946年（昭和21）の春まで続いた。

帰国は4月と決まった。朝は身の回りの品を売り払うと、できるだけお金を作った。そして上海に来ていた清水一等書記官のもとを訪ね、船の相談をした。

「父はすでに弱っています。病院船で帰国することはできませんか？」

「それは可能です。しかしそうすると、父上はともかく、健康なあなた方は船底に押し込まれてしまいます」

「小さい子もいますので、それは避けたいです。もし、お金を包んだら、一等船室を確保することはできますか？」

「それはいい考えです。早速、手配しましょう」

清水一等書記官は、上海の港務局に出向している桜井という役人を紹介してくれた。朝はお金を託した。

朝は、港務局の役人の指示に従い、帰国の準備をした。10日分の食料に、パン20個。ソーセージや干し魚、キャンディも確保した。

出発の日、早朝から朝たちは並べさせられた。

ひとりずつ、中国の役人が細かく検閲していく。並び始めてから4時間以上経った頃、ようやく朝の順番になった。

朝の荷物の点検をしたのは、中国人の女性警官だった。彼女は、荷物の中にアメリカ製のコンパクトを見つけた。何も言わず、それを自分のポケットに忍び込ませる。すると、それを見つけた中国人検査官が、手でストップをかけ、返すように促した。女性警官は一瞬驚いた顔をしたが、それでも渋々、返してよこした。実は、桜井氏が、中国の検査官にお金を握らせていたのだった。

朝たちは、上海の港に停泊している白龍丸に乗り込んだ。案内された一等船室の扉を開けると、中にはベッドが2つあった。老齢の健一と幼い裕子がベッドを占拠し、朝とアキは、床に毛布を敷いて転がった。

これは幸運なことだった。白龍丸の通路は人で溢れ、絶えず、船室はノックされた。同室させてくれないかと頼んでくるのだった。落ち着いたあと、朝ははしごを下り、船底を覗いてみたが、船底の床は見え、すし詰めになっていた。トイレにも人がいたのである。

病気がちの健一のことを思えば、お金を遣って一等船室を確保できたことは、幸運としかいいようがなかったのである。

何日かして、船は博多港に入った。

ここでは、占領軍——アメリカ人のチェックを受けなければならなかった。だが、先に到着していた船の検査もあり、すぐに解放されそうもなかった。すでに船内の食料は、尽きようとしていた。

朝は、船のリーダー格の人間を見つけ出すと、提案した。

「このままじっとしているわけにはいきません。よろしければ、船の女性を代表して、私が英文の手

紙を書きましょう。この船には、病人もおらず、さしたる検査を必要としていません。女性や子どもも多いので早く帰してください、とお願いするのは、おかしい話ではありません」

朝は、港湾を担当するアメリカのトップに、手紙をしたためた。すると翌朝には、アメリカ兵2名がやってきて、船を見回った。そしてその日のうちに、上陸が許可されたのである。朝は、乗客たちに大いに感謝された。

朝たちは、列車で東京へと向かった。

列車は、品川駅に止まった。

品川の駅で降り立った朝は、言葉がなかった。

焼け野原だった。

道には車もなく、誰もが肩を落として歩いている。

これがあの戦争の結果なのだ。これが、愚かな戦争がもたらしたものだだった。

朝はこの時、決してこの光景を忘れまい、と心に誓った。

松岡朝物語(仮称) 第13回

第13回 敗戦——新たな出発

文／角山祥道

63

1946年(昭和21)春。

中国から戻ってきた松岡朝らが目にした光景は、一面の焼け野原だった。文字通り何もなかった。だが立ち尽くしているわけにはいかなかった。今夜寝る場所を探さねばならない。朝はまず、日本交通公社——現在のJTBの知り合いの横田氏を訪ねた。

横田氏は朝たちの来訪をことのほか喜び、挨拶も早々に、大きなテーブルを机に広げた。

「松岡さん、あなたの家がどうなっているか地図を見てみましょう」

それは、米陸軍地図局(AMS)が作った1万2500分の1の地図だった。空襲で完全に破壊された地域は濃い赤、部分的に破壊された地域は薄い赤で塗られている。

「……」

朝は、自宅のあった四谷を指さした。そこは真っ赤な色で塗られていた。

朝は、横田氏の車を借りて、自宅に向かった。地図は正確だった。家は跡形もなく焼けてしまっていて、庭の隅には朝が植えた木だけが辛うじて残っていた。家のあった場所には、見知らぬ人の小屋があった。

日本交通公社に戻ってもう一度、地図を見る。四谷に限らず、新宿の知人の家のあった場所も、真っ赤に塗られている。朝が考えつくところは、すべて濃い赤で彩られていた。茫然としていると、横田氏が声をかけてきた。

「もし宿泊場所にお困りなら、東京駅に行かれたらどうでしょう。地上の駅舎は空襲でやられてしまいましたが、地下は無事だったんです。そこに簡易宿泊所があります」

行ってみると、そこには、一晚10円で泊まれる臨時宿泊所が開設されていた。といっても、簡易二段ベッドが並べられているだけの施設だ。ひとまず寝る場所は確保できた。朝がほっとしていると、傍らの父・健一が大きなため息をついた。

「関東大震災の時、いちばん最初に助けに来てくれたのは、アメリカだ。そのアメリカと日本は戦ってしまったのだよ。負けるのは当たり前だ。……それに、もうアメリカは助けてくれまい。復興させるのは容易なことではないな。我々の足で立ち上がることはとても無理だろうよ」

朝も同じことを感じていたが、それを口に出すことは憚られた。「無理だ」と口にした途端に、崩れ落ちそうになると思ったからだ。

「どうにか方法を見つけ出さなければなりません。今からあまり落胆するのはやめて、とりあえず休みましょう」

朝は父にそう言葉をかけたが、それは自らを励ます言葉でもあった。

翌朝、朝は杉並の文殊院へ行ってみることにした。ここは真言宗の寺院で、松岡家の菩提寺でもあった。かつて真言宗の本山である高野山で修行していたことのある健一は、菩提寺に対しても事あるごとに寄進していた。付き合いも深く、ここならば相談に乗ってくれるのではないかと、朝は考えたのだ。

笹塚駅で電車を降りると、朝たちは文殊院へと向かった。文殊院は神田川の近くにあり、駅からは徒歩で、ゆうに30分はかかる。80歳を超え身体が衰弱した健一と、8歳になったばかりの裕子を連れての道のりは、朝の手に余った。

朝は、思わず目の前の青年に声をかけた。

「私たちは中国から帰ったばかりの者ですが、これから文殊院まで行きたいのですが、手伝ってはいただけないでしょうか？ 風が強くて、私たちの力では父を支えきれないでいるのです」

青年は快く引き受けてくれ、片側から健一を支えてくれた。しばらく歩いて行くと、ガソリンスタンドで三輪車を止めている人を見かけた。聞くと、文殊院のほうに向かうという。朝は青年にお礼を言って別れると、三輪車の後ろに健一と裕子を乗せてもらった。

やっとのことで文殊院に着くと、本堂が焼け落ちている。茫然としていると、敷地にあった家から、墨染めの僧が出てきた。土居住職だった。住職に案内され、朝たちは昼食をご馳走になった。久しぶりに口にした白米は、何よりのご馳走だった。

住職にこれまでの経緯を説明すると、健一を預かってもらえることになった。

「次は私たちの寝る場所を探さないと……」

朝は、松山常次郎氏を訪ねてみることにした。共に戦争を回避するために南京で奔走した氏のことを、朝は思い出したのだ。松山氏の自宅は、代々木にあった。

思い切って訪ねてはみたものの、あいにく氏は留守だった。次男の信氏が玄関先に出てきた。

「南京から引き揚げてきた松岡ですが、行く当てがなくて困っております。泊めていただくことはできないでしょうか？」

だが信氏は朝と面識がない。信氏が困惑していると、後ろから声がした。

「先生！ しばらくです。どうなさったのですか？」

朝が以前、横浜共立学園で社会福祉を教えていた頃の教え子だった。彼女は信氏の知己で、松山氏宅に居候していた。教え子がいわば身元保証をしてくれる恰好となり、安心した松山信氏は、朝たちを奥の空いている部屋に招き入れてくれた。

畳の上に荷物を置いた瞬間、朝は、激動の日々にひとまず終止符が打たれたことを、ようやく感じたのだ。

その頃、街に流れていたのは、『リンゴの唄』（サトウハチロー作詞、万城目正作曲）だ。戦後映画の第1号『そよかぜ』（1945年公開）の挿入歌だったこの曲は、主演の並木路子によってうたわれ、戦後初のヒット曲となった。

〈赤いリンゴに くちびる寄せて……〉

だが、その「赤いリンゴ」はどこにもなかった。特に都市部では、手に入りようがなかったのである。実際この年に、食べ物の怨みから、歌舞伎俳優の片岡仁左衛門一家5人が、同居人に惨殺されるという事件も起こっている。同年5月19日の食料メーデーのデモには、25万人が参加した。

〈朕はタラフク食ってるゾ。汝、人民は飢えて死ね〉

デモにはこんなプラカードまで登場した。

ついこの間まで神と崇めていた天皇を愚弄するほど、日本人の食糧事情は悪化していたのである。8月には、全国一斉に闇市取り締まりが実施されるが、取り締まりしなければならぬほど、闇市が横行していたともいえる。

代々木にも、地方から行商人がやってきた。もちろん、闇だ。だが、魚も、肉も、彼らから手に入るほかなかった。

毎日の生活は、それまでどうってかわって単調に流れていった。

朝にとっては、戦争が終わったというのに、むしろ、終わりのない悪夢の中に生きているように感じられた。それでも生きていかなければならない。朝には、朝を頼る人々がいた。

文殊院でお世話になっていた父・健一は、身体が弱っていたせいもあって、しきりと弱音を吐くようになった。田舎に住む知り合いの「こっちにこないか」という勧めもあり、健一もそこで余生を送りたいという。そこで朝は父・健一を知り合いのもとへ送り届けた。一方の母・幸は戦火を避け、知り合いを頼って秩父の山に避難していた。朝は母を代々木に迎え、また一緒に暮らし始めた。

一段落した朝は、いまや娘となった裕子のことを考えねばならなかった。裕子には教育が必要だった。

渋谷区役所の教育課を訪ねると、住まいの近くの鳩の森小学校への転入手続きをしてくれた。裕子は年齢的には小学二年生だが、中国では戦中の混乱で、小学校教育を受けていない。小学一年生から学ばせてもらえないかと頼むと、担当者が笑いながら首を振った。

「戦争中は非常警報が絶えず鳴ってしましてね。一日に何度も防空壕へ避難せねばなりませんでした。だから誰一人、勉強したり、本を読んだりできていません。どの子も、一年生の勉強など満足にできていませんから、お子さんはそのまま2年生のクラスに入ったらどうでしょうか」

着る服も問題だった。

学校に行くとなると、何かましなものを着せなければならぬ。だが焼け野原の東京で、服を手に入れることは難しかった。そこで朝は、ニューヨーク在住のアメリカの友人に、このことを手紙で書いて送った。すると、1か月後には、裕子にぴったりのサイズで、かつセンスの良い服やお人形など、日本では得られない贈り物が次々と送られてきた。

荷物には手紙が添えられていた。

「朝、手紙をありがとう。あなたが元気でいてくれて、私はとても安心した。日本のあなたがたに対してアメリカがした仕打ちにもかかわらず、日本の友から手紙を受け取ることが出来るとは！ 思ってもみなかったことなので、とても嬉しい」

届けられた服以上に、朝は手紙が嬉しかった。

しかし同時に、友人の国と戦争してしまった事実を、今さらながら悲しく思った。

1946年にはいろいろなことが動き出していた。4月10日には総選挙が行われ、日本初の女性議員39名が誕生していた。ようやく念願の、女性の国政参加が認められたのである。さらに11月3日に、日本国憲法が公布され、変化は決定的となった。

朝はこうした変化を、複雑な思いで見ている。

朝は戦前、アメリカの大学院で労働法などを学んだが、帰国した日本では、ひとりとしてオフィスに働く女性の姿を見ることはなかった。工場で働くならともかく、男性と机を並べて一線で働くことなど、夢また夢だった。国会議員などなおさらである。

ところが、あの悪夢のような戦争と敗戦を経て、日本はがらりと変わった。今では女性をオフィスで見かけることは稀ではない。朝自身が望んでいた社会だ。だがそれもこれも、アメリカからやって来たマッカーサー元帥が、「秘密警察の廃止」「労働組合の結成奨励」「婦人解放」「学校教育の自由化」「経済の民主化」という「五大改革」を日本政府に突きつけたからなのだ。いわば戦争を経たことで、日本は自由な社会を手に入れたのである。何という矛盾だろうか！

朝にとって、戦争とは、友人——アメリカや中国の友人との仲を引き裂くものだった。3つの国の掛け橋になりたいと、微力ながらも、何年も奔走した。戦争を阻止したいと願って、一心不乱に動き回ったが、結局はすべてが徒労に終わってしまった。

戦争を止めようなどという大それた考えを持ってはいたわけではない。いや、頭のどこかで、「止められる」と信じていた。だが、自分の手はあまりにも小さ過ぎ、すべてがこぼれ落ちてしまった。そして憎むべき戦争は、日本人に、自由な生活を与えてしまった——。

ある時、朝はひとりで皇居の二重橋前を歩いていた。

お濠の向こうは、ひっそりと静まりかえっていた。かつて、あそこには、「神」と崇められた人が住んでいた。日本人は現人神をいただき、絶対服従を旨としていた。

しかし8月15日の無条件降伏以来、歴史は変わったのだ。もう、「家」や「家族」に縛られることはない。長男も次男も平等な存在だ。これも、敗戦がもたらした変化だった。いったい自分は、何のためにがんばっていたのか。

朝はさまざまな感情がないまぜになり、落胆のあまり、何をしたらいいのか分からなくなってしまった。

他の人のためになら、朝はいくらでも動いた。労苦を惜しまなかった。だが自分のこととなると、はたと考え込んでしまうのだ。いったい何をすればいいのか。

何もしなかったわけではない。朝は持ち前の英語力を駆使し、アメリカ人に日本語を教えるなどして、食い扶持を稼いだ。

GHQや進駐軍には、日本語と英語の両方に堪能な朝のような人材を欲していた。だが朝は、彼らに仕えるのだけは嫌だった。彼らにかしづくために英語を学んだのではない。朝はそれらの仕事に、誇りを感じることはできなかったのだ。

他にも職を探して、いろいろな会社を訪れた。

たとえば、YMCAでは、アメリカ人と日本人と一緒に働いていたが、アメリカ人のスタッフは、その食堂で食事をとった。だが日本人スタッフは、同程度の仕事をしているにも関わらず、食堂に足を踏み入れることは叶わず、弁当持参で職場に通ってきていた。もちろん、日本人の給与はアメリカ人よりも低かった。

恵まれているとされたYMCAでさえ、この有様だった。朝はアメリカで学んだことを生かしたい

と考えていたが、こうしたいわれなき差別を受け入れることはできなかった。たしかに日本は戦争に負けたが、それと差別とは関係がない。

何もしなかったわけではないが、張りのない日々が続いた。朝にとっては、娘となった裕子の存在だけが生き甲斐だった。彼女の存在がなければ、とっくに抜け殻のようになっていただろう。

何年も空疎な日々が過ぎた。

人々は、NHKラジオの連続放送劇に熱中し、街中には、笠置シズ子の『東京ブギウギ』（鈴木勝作詞、服部良一作曲）が流れた。昭和電工疑獄や帝銀事件、太宰治の入水自殺が世間を騒がせていたが、そうしたことさえも、朝の前を素通りしていったのだった。

藤山一郎と奈良光枝がうたう『青い山脈』（西條八十作詞、服部良一作曲）が、街に流れていた頃だろうか。朝は、国際連合に務めていた古くからの友人、原田健氏に会うため、中央線の電車に乗っていた。車内は混み合っていたが、座席に腰掛けることができた。聞くとともになしに、乗客の交わす声を耳にしていると、ふと、聞き覚えのある声が耳に飛び込んで来た。

朝には、それが誰だか分かった。かつて博士論文を執筆する際に、アドバイスをもらうなど、たいへんお世話になった方だった。だが今の自分は、合わせる顔がない。朝はずっと下を向き続けた。

東京駅で多くの人が降りた。朝も降車すべく、立ち上がって、そこで初めて声の主と目が合った。一緒にホームに降り、改めて向き合った。

「やはり松岡さんでしたね。どこへ行かれるんですか？」

「国際連合に務めている友人に会いにいくところなんです」

「それはちょうどいい」

氏は、傍らの男性を朝に紹介した。彼も国際連合で働いているという。

「松岡さん、あなたのお名前は存じ上げていますよ。中国でたいそうな働きをなさったそうですね。ところで、国際連合に『ユニセフ』という組織があることをご存じですか？」

朝が首を振ると、話を続けた。

「ユニセフは、戦争で傷ついた世界中の子どもたちを救うために設立された組織です。先日、日本にもユニセフからマルガリータ・ストレーラー女史という駐日代表が派遣されてきたのですが、実は人手が足りなくて困っています。今日ここでお会いしたのは何かの縁です。松岡さん、ストレーラー女史を助けてあげてはもらえませんか？」

ユニセフは、1946年に誕生したばかりの組織だった。現在は、「国際連合児童基金」(United Nations Children's Fund)の名称で知られているユニセフ(UNICEF)だが、この時の正式名称は、「国際連合国際児童緊急基金」(United Nations International Children's Emergency Fund)である。略称のUNICEFはそのまま変わっていないが、この当時は、子どもを対象にした戦後の緊急援助を目的としていた。

初代事務局長のモーリス・ペイトは、「飢えに苦しむ子どもたちに1日1杯のミルクを」というスローガンを掲げ、各国から拠出金を募った。粉ミルク(脱脂粉乳)——通称「ユニセフミルク」が、大戦後、傷ついた子どもたちを救ったのである。

1949年、日本にも手が差し伸べられ、横浜生まれで、赤十字国際委員だったスイス人女性、マルガリータ・ストレーラー女史が、ユニセフ初代駐日代表として来日したのである。

「日本の文部省は、ストレーラー女史のために、タイピストを派遣してくれました。しかしどうやら、人手が足りず、ストレーラー女史がお困りのようなのです。松岡さん、ボランティアで手伝ってはもらえませんか？」

「急なお話で、ユニセフという名も、今日初めてお聞きしました。ユニセフについて何も存じ上げませんし、どんなことをするのかもわかりません。すぐにお答えは出来ません」

彼らと別れたあと、朝は、原田健氏のオフィスを訪ねた。

氏は、新渡戸稲造氏の秘書を務めていた方で、朝はその頃からの知り合いだった。原田氏に、中央線での邂逅の話をする、自然とユニセフの話題となった。

「松岡さん、これはあなたにしかできない仕事ではないでしょうか。あなたの経験と語学力は、ユニセフに必要です」

「わかりました。ストレーラー女史のために、喜んでお役に立ちたいと思います」

後日朝は、東京駅の近くのユニセフを訪れた。GHQの公衆衛生福祉局（PHW）が東京駅の近くのビルにあり、ユニセフは、同じフロアを間借りしていた。

小さなオフィスで、ストレーラー女史は朝を出迎えた。女史は非常に背が高い、金髪の女性だった。

「こんにちは、ミス松岡」

流暢な日本語だった。

1898年（明治31）に横浜で生まれたストレーラー女史は、この時51歳。朝の5つ年下だった。女史の父は、生糸の輸出を行うストレーラー商会の日本の責任者であり、父の仕事の関係で、女史も14歳頃まで日本で過ごしていた。したがって、日本語を話す分には、何ひとつ不自由していなかったが、日本語をスラスラ読むというまでではなかった。

「ミス松岡、時間を見つけてここに来て、私のために、手紙を読んでいただきたいのです」

彼女が指で示した部屋の角には、たくさんの手紙が山と積まれていた。

「秘書のミス大谷は、タイプをするのに忙しく、手紙を読む時間を取れないのです」

朝は、いちばん上の手紙を手にとった。

そこにはこう書いてあった。

〈親愛なるユニセフさま。贈り物をありがとうございます……〉

朝は目頭を押さえた。

手紙を送ってきた主は、ユニセフが国連の組織であることも知らない。だがユニセフからの贈り物でとても幸せになったことを、こうして伝えずにはいられなかったのだ。

ここに私の仕事がある。

朝はストレーラー女史に向き合った。

「わかりました。まだあなたのこと、あなたのお仕事についても何も存じませんが、一生懸命がんばります」

翌日から朝の仕事が始まった。

ボランティアなので、当然、給料は出ない。それでも朝は良かった。困っている人のために働く。そのことが朝には何より嬉しかった。ほかの仕事の都合で、毎日出るわけにはいかなかったが、朝はユニセフに通った。

たくさんの手紙の向こうに、朝は子供たちの笑顔を見ていた。

（つづく）

29年度事業報告 ならびに30年度事業計画案

※会計報告は別添とします

■平成29年度事業報告

1. 国際交流事業

平成29年春に、首都キャンベラのNGA（ナショナルギャラリーオブオーストラリア）への日本画25点の移管が決定したとの知らせが届いた。当会が1977年の日本画贈呈受け入れ地として、首都キャンベラを希望したが、当時大きなミュージアムがキャンベラになかったため、これまでの40年間はVictoria州メルボルンのNGV（ナショナルギャラリーオブビクトリア）の保管となっていた。

- 1) 国と国との合意の移管なので、日本側としては今後、日本画を通しての事業を会の核とすることに理事会で決定。しかし、豪州のお国柄と日本とは温度差がある。ことに文化交流はこちら側からの働きかけが絶対に必要である。（この移管の成果の陰には、28年2月6日～12日に当会から、ギッシュ会長、霧生理事、羽鳥理事、三名の訪豪があつたのがきっかけとなっている） 会としてできるサポートに取り組んでいきたい。
- 2) 平成28年4月12日にオーストラリア大使館を訪問。シダル参事官からNew Colombo Planについて知ることができた。今後、日本画の研修生招聘費用に活用できるかを継続して考えていきたい。

2. 松岡朝物語

会の創設者、松岡朝（1893～1980）は、87年の生涯を、祖国日本の文化を心から愛し、日本の子ども達の将来を案じて、国際親善にささげた。一人の日本人女性が遺した数多くの活動秘話が自筆の英文原稿に記されているのを見つけた私たちは、それらを翻訳してもらい、文章にまとめて後世に遺すことで、当会創設の由来、そしてどのような活動を続けていくべきかを再確認する貴重な資料（日本画25点についての質疑応答）を添付する。

3. つどい

“豪州あれこれ” 講演者：角谷 滋 日時：2018年3月31日（土）13時～14時半
出席者：16名 豪州と日本企業との合資に関して、日本が信頼されているという話し等、知ることができた。おやつ持ち寄りで、質疑応答も盛んな親睦会形式のつどいであった。

4. 会報発行

会員との親睦、情報交換を図る為、年三回の発行を行った。

5. チャリティーコンサート

<箏（こと）とハープ> 東洋と西洋の響きの出会い。
平成29年9月29日（金） 霊南坂教会にて 箏／マックイーン時田深山、ハープ／有馬律子
弦楽四重奏／西山昌子、有馬玲子、千年美奈子、間瀬利雄 オルガン／飯靖子
主催：海外と文化を交流する会 協賛：東洋英和・福島の子ども支援プロジェクト

6. 東京ハルモニア室内オーケストラ支援

長年、当会主催のコンサートの支援を続けてくれており、文化交流にも大きく貢献している団体なので、当会も支援をおこなっている。

7. 当会ホームページの充実
公にも魅力ある情報提供ができるように努力している。

以上

■平成30年度事業計画案

1. 国際交流事業

1) 日本画25点のNGAへの移管の追跡

オーストラリア国民への友好の絆としての日本画巨匠による25点は、1977年以来、メルボルンの芸術省の傘下にあったが、2017年12月17日付にてMichael O'Leary (Director Agencies and Infrastructure) 氏からの書状により、The Minister for Creative Industries (大臣) が、キャンベラのNGA (National Gallery of Australia) に移管されることを認めたと報せてきた。これはNGV とNGA 両者の合意のもとによる決定であるとのこと。移管の詳細は追って報告あるとのことだが、実現が何時なのか追跡する。**(※現在は、移管が完了)**

このことは、豪州と日本との国対国の合意で実現となったことから、今後も日本画にまつわる活動を会の核として、豪州との文化交流をより堅固なものに築いていけると良い。そして、日本画数点なりとも常設してもらえるように働きかけていきたい。

藝術思想家であり、ボストン美術館で10年間、日中美術部部長を務めた岡倉天心も、「東西の理解には芸術鑑賞が最適である」と考えたとある。(H.30年5月2日の朝日新聞記事から)

2) 文化交流プロジェクトチームの立ち上げ

さらに文化交流推進に努めるため以下の活動を行うべく、それぞれプロジェクトチームを立ち上げる。

・研修生の短期招聘

将来、豪州の若者が、日本画に関心を寄せ、研修することを奨励する立場の教員を招聘の立案をする。

・New Colombo Plan (新コロombo計画) の利用促進

現地大学に同計画への申請を促し、日本での短期研修の費用充てることを考えたい。具体的に手始めに何から手を付けたら良いのか？まずはコンタクト先を探す。

2. 50周年記念行事

1) 当会を紹介するパンフレットの制作

2) 記念事業の為に募金活動

3) 松岡朝の伝記とりまとめ

・松岡朝物語伝記用原稿

2016年以来2年がかりで完成。今後、会としてこれをどうしたいのか検討する。

・日豪Pressでの特集

日豪Press (在豪の日本語新聞) が松岡朝に強い関心を示していて、特集を組みたいとのことなので働きかける。

・英文作成

会の創立趣旨、日本画贈呈の経緯等、英文にして、NGA はじめオーストラリアの関係筋に送る

ことで、当会の趣旨をより深く理解してもらおう。

4) 50周年記念 Charity Concert

“クリスマス チャリティーコンサート”を主催する。

【日 時】2018年12月7日(金)

【会 場】霊南坂教会

【出演者】青盛のぼる、西山昌子、有馬玲子、千年美奈子、間瀬利雄、有馬律子

3. つどい

会員相互の親睦になる、良い(かつ遂行上無理のない)企画提案がある時に行う。

4. 会報発行

会員に会の活動報告をする。

5. 東京ハルモニア室内オーケストラ支援

文化交流に大きく貢献している団体である。特に、当会主催の音楽会になくってはならないアドバイスを長年にわたり協力支援してくれている。

6. 会ホームページの充実

- ・ Visual 化拡大 (映像のリンクなど)
- ・ 会の活動、松岡朝物語の掲載
- ・ 活動の要点だけでも英文にて掲載

以上

会費納入のお願い

年会費納入をお願いいたします。子ども達に、より良い日本を残すための当会の活動内容は現在まで高く評価されて参りました。これも皆さまのご理解があればこそでございます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

日本にあるものはオーストラリアには無く、オーストラリアにあるものは日本には無いと言われており、友好を深め、相互協力を推進することが重要な意味を持つ関係にあります。日豪両国の芸術専攻生の教育交流の発展や、オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展の実現を通して。相互協力関係の深化を図りたいと思いますので、是非ご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 一般社団法人 海外と文化を交流する会
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 渋谷支店(普) 0026193 海外と文化を交流する会
会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail: official@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>